

なら

植防ニュース

2024年度農薬安全使用研修会

3月21日奈良県農業研究開発センター交流

・サロン棟で開催され、約50名が参加した。

始めに、奈良県農業研究開発センター所長の國本氏から「農作物の害虫防除と農薬安全使用について」の講演があった。食品に対して消費者が求めることに「安全・安心」があるが、「安全＝安心」ではなく、科学的評価が可能な「安全」に十分な情報の提供や誠実な取り組み・姿勢から得られる「信頼」が合わさって「安心」となる。消費者が食品で不安に思う項目という調査で20年前は残留農薬に9割が不安に感じていたが、令和5年では5割以下に減少した。今後も、安全・安心を担保していくため、農薬事故の発生を防ぐ必要がある。

そのために、①農薬表示の遵守、②適切な保護具の着用、③ドリフトの防止、④使用記録の記帳、⑤使用器具の洗浄、⑥適正な保管が重要である。①ではトマトやミニトマトなど似た作物でも農薬登録は異なる点や異なる製品で同じ有効成分を含む農薬による使用回数超過など、注意が必要である。③では飛散の少

一般社団法人奈良県植物防疫協会

〒633-0046 桜井市池之内130-1

奈良県農業研究開発センター内

TEL:0744(47) 4861

FAX:0744(47) 4862(専用)

HP: <http://www.narasyokubo29.sakura.ne.jp/>

目次

◎農薬安全使用研修会	1,2
◎令和6年度の病害虫発生について	3,4
◎登録失効になった農薬	4



【 國本 佳範氏 】

ない剤型や施用法の選択、飛散防止を意識した散布動作を行う。また、エスター線とネットを利用した簡易型障壁の利用も有効である。⑤ではホース内の残液があると、次に散布する農作物に残留基準値超過の恐れがあるため、洗浄を徹底する。農薬適正使用は消費者からの信頼を得ると同時に使用者の安全も守るため、適正な使用をお願いしたい。

一方、化学農薬自体の使用を減らすことで

も使用に伴うリスクを回避できる。いちごでは県内の60%以上の生産者が、天敵製剤のチリカブリダニとミヤコカブリダニを利用してハダニ類の防除を行っている。また、県内のキク産地ではオオタバコガによる被害が問題になっていたが、低コストな超簡易ネット被覆法が現地導入され、被害が減り、殺虫剤の散布回数も半減し、生産者からも好評を得られた。さらに、殺虫剤の使用減により、土着天敵が活動し、ナミハダニの防除に成功する例も見られた。

最後に、黎相庭園／P-T Researchの笹部氏から「造園・緑化樹木の病害虫管理」について講演があった。農作物とは違い造園・緑化の分野にそもそも農薬は必要だろうか？と思われるかもしれない。しかし、緑化樹木にもブナ類のナラ枯れやマツのマツ枯れ、サクラ類のクビアカツヤカミキリ(以下クビアカ)など様々な病害虫が発生している。クビアカはサクラ類だけでなく、モモやウメ等の果樹にも被害が出ており、緑化樹木と農作物の病害虫は共通することが多い。このため、緑化・造園の分野も農作物の安定生産を支えるため、農薬を用いた病害虫防除管理が必要である。

ナラ枯れはカシノナガキクイムシが媒介するナラ菌によって引き起こされ、枯死する。また、枯死せず残った木も腐朽菌の感染が広がり、その後倒木するため、公園でも被害が発生し、安全上問題である。予防法は樹幹注入材や



【 笹部 雄作氏 】

ビニール被覆が挙げられているが、ビニール被覆の効果はあまり見られないのが現状である。樹幹注入剤も樹幹注入により樹木内の通水が妨げられる場合があるため、過度な使用は注意が必要である。また、マツ枯れ症状はセンチュウによって生じるものと糸状菌によって生じるものがあり、それぞれに適した防除法をとる必要がある。

クビアカは登録農薬も増えてきているが、防除効果よりも増殖能力が勝っているため、根絶は不可能に近く、小エリアや個体を徹底的に保護するしか手立てがない状態である。

サクラ類のてんぐ巣病やイヌツゲ枝枯れ病は罹病部を切ることで効果があるが、クスノキでは強剪定後の新葉にクスノキダアザミウマが多発加害し、その後炭疽病が発生して被害が拡大する事例もあり、注意が必要である。

緑化樹木は農作物に比べ登録農薬が少ないが、樹木類で登録のある薬剤や対象病害虫への適用拡大が進んでいる薬剤もあるため、農薬表示を確認して使用していただきたい。

令和6年度の病害虫発生について

奈良県病害虫防除所 藤森颯太、浅野峻介

今年度の気象は、4～6月の降水量が平年より多かった。また、4～11月までは平年より気温が高く推移し、月平均気温は5月と8月を除いて統計開始以降、最も高い気温を記録した。今年度の病害虫の発生状況の概略は以下の通りである。

水稻

トビイロウンカが6月に九州を中心に平年よりも早く飛来し、その飛来量も平年よりも多い県が複数みられた。このことから奈良県でも早期飛来・多飛来を警戒していたが、梅雨期の飛来は確認されず、水田巡回でも発生が確認されなかった。今後、被害増加の要因である梅雨期の飛来と夏の高温に警戒していきたい。

昨年に続き本年も紋枯病がやや多く、特に9月の高温の影響により上位葉への病斑の進展と株の倒伏が確認された。本病はこれまで広範囲に発生はしていたものの、被害が問題化することが少なかった。本病は菌核で水田内に残存するので、多発水田では次年度の発生にも注意する必要がある。

コムギ

コムギ赤かび病の発生が県内全域で確認され、過去10年間で最も多発した。本病の感染適期である開花期に降雨が多かったことが要因と推察される。被害残渣が伝染源となるため次年度は注意が必要である。菌密度が高まっていることから、殺菌剤の散布は通常の開花期に加え、その1

週間後にも追加する。

果樹

果樹カメムシ類の当たり年となり、被害が多発した。越冬量は過去10年で最も多く、予察灯の誘殺は5月上旬から多かったことから、5月16日付けで注意報を発表した。令和7年については、越冬量が過去の少発年と同様に少なく、前半の発生量は少ないと考えられる。一方、後半はエサとなるスギ、ヒノキの球果が多いと予想されることから、次世代成虫の飛来に注意が必要である。

野菜・花き

8月以降、オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウが多く、10月1日付けで病害虫情報を発表した。この3種は長距離移動することが知られており、夏の高温で増加したのではなく、飛来量が多かったと推測される。また、晩秋の高温により野外での活動が長く続いた。特にハスモンヨトウは、各種品目において被害が多発した。ハスモンヨトウは防除の主力であったジアミド系殺虫剤をはじめ、多くの殺虫剤で感受性が低下した個体群が確認されている。活動の長期化と各種殺虫剤の感受性低下により、被害の拡大につながったと考えられる。今後は防除薬剤の選択に注意するとともに、不明の点があれば病害虫防除所等に問い合わせられたい。

イチゴでは定植後にチャノキイロアザミウマによる被害が県内各地で発生した。イチゴにおける本

種の被害は、これまで一部地域のみであったが、分布が拡大していると考えられる。本種は果実被害だけでなく、葉の萎縮を引き起こす。ホコリダニ類による被害と似ていることから、防除薬剤の選択を誤らないよう注意が必要である。

キクでは夏以降、クロゲハナアザミウマによる被害が多く見られた。これまで殺虫剤の効果が高いと考えられていたが、今年度スピノエースなど複数の殺虫剤で感受性の低下が確認された。今後の動向を注視していきたい。

登録農薬失効情報（2024.12.1～2025.2.28）農林水産消費安全技術センター（FAMIC）の登録農薬失効情報より抜粋

登録番号	農薬の種類	農薬の名称	申請者名 (略称)	失効日 月/日/年
殺虫剤				
4982	M E P 乳剤	日産スミチオン乳剤	日産化学	1/15/25
11584	クロルピリホス乳剤	日産ダースバン乳剤 4 0	日産化学	2/4/25
11585	クロルピリホス乳剤	クミアイダースバン乳剤 4 0	クミアイ化学	2/4/25
13376	アミトラス乳剤	ダニカット乳剤 2 0	日産化学	1/15/25
14043	メタアルデヒド粒剤	ナメキット	OAT7ケアリオ	12/9/24
14129	クロルピリホス乳剤	ダースバン乳剤 4 0	カネヨウ	2/4/25
16314	プロフェノホス乳剤	エンセダン乳剤	シンジエンタ	2/28/25
19619	クロルピリホス粒剤	ダースバン粒剤	カネヨウ	2/4/25
19620	クロルピリホス粒剤	日産ダースバン粒剤	日産化学	2/4/25
19621	クロルピリホス粒剤	サンケイダースバン粒剤	サンケイ	2/4/25
22151	クロルピリホス水和剤	ダースバン D F	カネヨウ	2/4/25
22661	ジノテフラン・プロプロフェジン水和剤	クミアイアブロードスタークルゾル	クミアイ化学	2/19/25
22662	ジノテフラン・プロプロフェジン水和剤	アブロードスタークルゾル	日本農薬	2/27/25
23469	シアントラニリブロール水和剤	エスベランサ	クミアイ化学	2/6/25
23471	シアントラニリブロール・チアメトキサム水和剤	ツインアタック顆粒水和剤	シンジエンタ	2/6/25
23651	シアントラニリブロール水和剤	ブレイクショット	シンジエンタ	2/6/25
殺虫殺菌剤				
22660	クロラントラニリブロール・ジノテフラン・プロベナゾール粒剤	M I C ビルダーフェルテラスタークル箱粒剤	三井化学加ワッ&ライフソリューション	12/5/24
22784	ジノテフラン・プロプロフェジン・フルトラニル粉剤	アブロードモンカットスタークル F 粉剤 D L	日本農薬	2/27/25
22907	クロラントラニリブロール・ビメトロジン・プロベナゾール粒剤	シンジエンタ ビルダーフェルテラチェス粒剤	シンジエンタ	2/6/25
23773	クロチアニジン・シアントラニリブロール・イソチアニル粒剤	スタウトバディート D X 箱粒剤	協友アグリ	1/9/25
殺菌剤				
19677	非病原性エルビニア カロトボラ水和剤	バイオキーパー水和剤	セントラル硝子	2/4/25
19679	非病原性エルビニア カロトボラ水和剤	日産バイオキーパー水和剤	日産化学	2/4/25
21546	シュードモナス フルオレッセンス水和剤	ベジキーパー水和剤	セントラル硝子	2/4/25
21718	非病原性エルビニア カロトボラ水和剤	エコメイト	クミアイ化学	2/6/25
21842	チオファネートメチル・メトコナゾール水和剤	クレハトップスペース顆粒水和剤	クレハ	12/2/24
22042	チオファネートメチル・メトコナゾール水和剤	クレハトップバスター顆粒水和剤	クレハ	12/2/24
22139	バリオボラックス パラドクス水和剤	フィールドキーパー水和剤	セントラル硝子	2/4/25
23086	銅・バチルス スズチリス水和剤	ケミヘル	カネヨウ	1/16/25
23387	テブコナゾール・フルオピラム水和剤	オルフィンプラスフロアブル	ハイエール	12/10/24
23919	フルオピラム水和剤	オルフィンフロアブル	ハイエール	12/10/24
除草剤				
4015	M C P A エチル粒剤	粒状水中 M C P 「日産」	日産化学	1/15/25
17343	ペンタゾン・M C P A エチル粒剤	日産グラスジン M ナトリウム粒剤	日産化学	1/15/25
18770	イマザキン・ベンディメタリン水和剤	オフ II フロアブル	カネヨウ	1/16/25
19183	クミルロン・テニルクロール・ベンゾフェナップ粒剤	ハビコラン粒剤	丸紅	12/3/24
21096	オキサジアゾン乳剤	ロンスター乳剤	ハイエール	2/3/25
22440	ダイムロン・ピラクロニル・プロモブチド・ベンスルフロンメチル粒剤	日農イッポン D ジャンボ	日本農薬	2/27/25
22454	ダイムロン・ピラクロニル・プロモブチド・ベンスルフロンメチル水和剤	日農イッポン D フロアブル	日本農薬	2/27/25
22839	ピラクロニル・プロピリスルフロン粒剤	ビクトリー Z ジャンボ	協友アグリ	12/17/24
22841	ピラクロニル・プロピリスルフロン水和剤	ビクトリー Z フロアブル	協友アグリ	12/17/24
22843	ピラクロニル・プロピリスルフロン粒剤	ビクトリー Z 1 キロ粒剤	協友アグリ	12/17/24
23146	インダノファン・ピラクロニル・ベンゾピシクロン水和剤	ライジンパワーフロアブル	日本農薬	2/27/25
24223	ピラクロニル・プロピリスルフロン粒剤	ビクトリー Z 4 0 0 F G	協友アグリ	12/17/24